

ベネディクト 16 世

詩編について

第七卷

・ 第 3 週 晩の祈り



資格もないのに唱えさせていたでいる聖務日課以外には、私はいろいろの本の中に、美しい祈りをしいてさがす勇氣はございません。そのようなことをすれば、頭が痛くなってしまいます。あんまりたくさんあって!…私にとって祈りとは、心のほとばしりであり、天に向ける単純なまなざしであり、また試練の最中にも、喜びの最中にある時と同じようにあげる感謝と愛の叫びです。

幼きイエズスの聖テレジア

	土	日	月	火	水	木	金
第 1 唱和	詩編 113		詩編 45	詩編 125	詩編 126	詩編 132 前	詩編 135 前
第 2 唱和	詩編 116		詩編 45	詩編 131	詩編 127	詩編 132 後	詩編 135 後
第 3 唱和	ヒィリピ 2	エフェソ			コロサイ		

詩編 113

親愛なる兄弟姉妹の皆様

今朗読された詩編の短い注解を始める前に、今日は敬愛すべきヨハネ・パウロ二世の誕生日であることを思い出していただきたいと思います。この日、ヨハネ・パウロ二世は85歳を迎えられるはずでした。私たちはヨハネ・パウロ二世が天から私たちをご覧になり、また、私たちとともにいてくださることを確信しています。この機会に私たちは、この教皇を与えてくださったことを主に深く感謝したいと思います。そして、教皇ご自身に、そのすべてのわざと労苦について感謝したいと思います。

1, 詩編 113 は、単純で美しい響きを持った詩編です。この詩編は、詩編 113 から 118 まで続く、伝統的に「エジプトのハレル」と呼ばれる、詩編の小さなひとまとまりの導入をなしています。ハレル詩編は、「ハレルヤ」すなわち賛美の歌です。それは、ファラオによる奴隷状態からの解放と、解放されて約束の地で主に仕える、イスラエルの喜びをたたえるのです(詩編 114 参照)。

ユダヤ教の伝統が、この一連の詩編を過越の典礼と結びつけたのは、偶然ではありません。過越祭は、その社会的・歴史的な意味と、また霊的な意味に従えば、多くの形で現れる悪からの解放のしるしと考えられたからです。

詩編 113 は、ヘブライ語の原文では 60 語あまりから成る、短い詩編です。そのことばはすべて、信頼と賛美と喜びに満ちています。

2, 最初の一連(1-3 節参照)は、「主の御名」をたたえます。ご存知の通り、「神の名」は、神ご自身の存在、すなわち、人類の歴史において、神が生き、活動しながら現存することを示す、聖書の用語です。

「神の名」という言葉は、3 回、情熱的に力強く用いられて、賛美の祈りの中心をなしています。詩編作者は言います。「日の上るところから日の沈むところまで」(3 節)、すべての存在、すべての時間は、感謝という唯一の行為において一致します。あたかも、地上から天に向けて、絶えることのない声が、宇宙の造り主であり、歴史の王である主をたたえるために立ち上るかのようです。

3, まさにこの天へと向かう働きによって、詩編は私たちを神の神秘へと導きます。実際、第 2 連 (4-6 節参照)は、主がすべてのものを超えていることを祝します。この主の超越は、単なる人間的な視野を越えた、垂直的なイメージで描かれています。詩編は言います。「神はすべての民にあがめられ」、「神は高く座」し、誰も主に並びうるものはいません。主は低く下って天を「見下ろされる」。なぜなら、「その栄光は天にそびえる」(4 節)からです。

神は、地上のものも、天上のものも、すべての存在をご覧になります。けれども、この神のまなざしは、冷酷な皇帝のまなざしのような、尊大で超然としたものではありません。詩編作者は言います。主は「低く下って」(6 節)ご覧になる(教会の祈りの訳では「見下ろされる」と)。

4, こうして私たちは、この詩編の最後の連(7-9 節参照)に至ります。ここで私たちの関心は、天の高みから地上の地平線へと移されます。主は私たちのうちの小さな者、貧し

い者を気遣って自らを低くされます。それゆえ、私たちは恐れから遠ざかるように促されます。主は、世のもっとも小さく惨めな者に対して、愛の眼差しを向け、力あるわざを行なわれます。「神は貧しい人を立ち上がらせ、恵まれない人を高く上げ」(7節)てくださいるからです。

このようにして、神は、困っている人、苦しむ人に身をかがめ、彼らを慰めます。そして、この言葉は、神が受肉され私たちと同じようなもの、世の貧しい者となるまで、身を低くされた時に、その究極の意味を見出し、偉大な現実となったのです。神は貧しい者に誉れを与えます。主はこの人々を「支配者とともに座らせ」(8節)てくださいるのです。そうです、「民の支配者とともに並ばせ」(9節)てくださいるのです。孤独な不妊の女性は、古代社会では乾いた無用の枝であるかのように、辱められていました。このような女性に、神は、何人もの子を持つ誉れと、大きな喜びを与えます(9節参照)。それゆえ、詩編作者は神を賛美します。神は、その偉大さにおいて私たちと異なりながら、同時に、苦しむ被造物にとっても近い方だからです。

詩編 113 の最後の数節の中に、「マリアの賛歌」(マニフィカト)のマリアの言葉が先取られているのを容易に見ることができます。「マリアの賛歌」は、「いやしいはしためをかえりみて」くださいる神に選んでいただいた者の歌です。詩編 113 よりもさらに徹底した形で、マリアは神をたたえます。神は「権力をふるう者をその座からおろし、見捨てられた人を高められる」(ルカ 1:48, 52, 詩編 113:6-8 参照)。

5、「使徒憲章」(7:48)に収められた古代の「晩の祈り」は、この詩編の喜ばしい冒頭部分を取り上げて、さらに展開しています。この考察の終わりに、この祈りを思い起こしたいと思います。それは、初期の教会がこの詩編に対して行った、キリスト教的な再解釈に光を当てるためです。

「子らよ、主を賛美せよ。主の御名を賛美せよ。

その大いなる栄光のゆえに、

私たちはあなたを賛美し、あなたに賛美の歌を歌い、あなたを祝します。

王である主。世の罪を除く、傷のない小羊であるキリストの父よ。

あなたに賛美と賛歌と栄光がささげられますように。

聖霊のうちに、御子を通して、父である神に、今もとこしえに。アーメン」

(S. Pricoco-M. Simonetti, *La preghiera dei cristiani*, Milano, 2000, p. 97)。

第3週 土曜日 晩課 第2唱和

詩編 116:10-19

1, 今私たちが唱えた、詩編 116 は、キリスト教の伝統の中でつねに用いられてきました。この詩編を用い始めたのは、聖パウロです。パウロは七十人訳ギリシア語聖書に従って、この詩編の冒頭(教会の祈りでは10節)を引用しながら、コリントのキリスト者にこう述べています。「『わたしは信じた。それで、わたしは語った(つぶやく時も神に信頼してい

る)』と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じ、それだからこそ語ってもいます」(ニコリント 4:13)。

使徒パウロは、詩編作者と霊的に同じ思いを抱いています。人間的な苦しみや弱さがあっても、徹底して信頼し、真摯にあかしを行うからです。ローマの信徒への手紙の中で、パウロはこの詩編の2節(11節)を取り上げて、神の忠実さと人間の不実とを際立たせて述べています。「人はすべて偽り者であるとしても、神は真実な方であるとすべきです」(ローマ 3:4)。

その後の伝統では、この詩編は殉教の賛美のために用いられます(オリゲネス『殉教の勧め』18:Testi di Spiritualita, Milano, 1985, pp. 127-129 参照)。「神を敬う人の死は神の前にとうとい」(詩編 116:15 参照)ことを確認するためです。また、この詩編は感謝の祭儀の典礼文で用いられるようになります。なぜなら、詩編作者は、「救いの杯」を上げて神の名を呼ぶからです(13節参照)。キリスト教の伝統では、この杯は、「賛美の杯」(I コリント 10:16 参照)、「新しい契約の杯」(I コリント 1:1, 25, ルカ 22:20 参照)と、同じものだと考えられます。これらは、新約聖書の中で、御聖体(エウカリスチア)を表す特別な表現です。

2, ヘブライ語の原文では、詩編 116(10-19節)は、その前の詩編(詩編 116:1-9)とひとつながりの構成となっています。この2つの詩編は一体となって、死の恐怖から解放してくださった主に対して、感謝をささげます。

ここで扱う詩編 116(10-19節)では、過去の苦しみが思い起こされます。詩編作者は、激しい絶望と不幸を口にする時も、信仰の炎を絶やさずに守ります(詩編 116:10 参照)。実際、詩編作者は、憎しみと欺きによる冷ややかな壁に取り囲まれています。なぜなら、彼の友人は偽りで、不実であることがわかったからです(11節参照)。しかしながら、今や祈りは感謝へと変わります。なぜなら、主はご自分に忠実な者を、偽りの渦から引き上げてくださったからです(12節参照)。

それゆえ、詩編作者は感謝のいけにえをささげる準備をします。祭儀の中では、聖なる酒を飲むための、いけにえの杯が用いられます。この杯は、自分を解放してもらったことへの感謝を表すしるしです(13節参照)。だから、祭儀は、救い主である神に感謝の賛美をささげる特別な場となるのです。

3, 実際、生贄の典礼に加えて、神の「すべての民」の集会が行われることがはっきりと述べられます。これらの民の前で、詩編作者は誓いを立て、信仰をあかしします(14節参照)。詩編作者による感謝の表明も、この人々の前で行われます。彼は、死が間近に迫る時も、主がその愛を自分に注いでくださることを知っています。神はご自分がお造りになった者の苦しみに無関心でいられず、その縄目を解いてくださるからです(16節参照)。

死から救われた詩編作者は、自分が主の「しもべ」、主に「仕える者の子」(同参照)だと考えます。「仕える者の子」は、中近東で、主人の家に生まれた者を表す、美しい言葉です。詩編作者は、自分が神の家に属する者であることを、謙遜に、感謝をこめて告白します。彼は、愛と忠実のうちに神と結ばれた、被造物の家族に属しているからです。

4, 詩編は終わりに、いつも、一つの祈りの言葉によって、再び感謝の典礼をささげようとし、この典礼は、神殿の中でささげられます(17-19節参照)。こうして詩編作者は、彼を取り巻く共同体の中で祈りをささげます。自分の話を語ることによって、詩編作者は、すべての人が主を信じ、愛するように促すことができるのです。それゆえ、私たち

は、詩編作者を取り囲んで、すべての神の民が、命の主に感謝する様子を思い浮かべることが出来ます。主は正しい人を苦しみと死の闇の支配するところに捨てておくことなく、彼を希望と命へと導いてくださるのです。

5、この考察の終わりに、大聖バジリオ(バシレイオス)の言葉に耳を傾けたいと思います。バジリオは、詩編 116 についての説教の中で、この詩編で行われる問いかけと答えについて、次のように注解しています。「主がわたしに与えてくださったすべての豊かな恵みに、わたしはどのように答えようか。わたしは救いの杯を上げる。詩編作者は、神から多くのたまものが与えられたことを理解しています。彼は無だったのに、存在を与えられました。彼は土から造られて、理性を与えられました。…それから、詩編作者は、人類のための救いの計画を知りました。主が、わたしたちすべての代わりに、あがないとしてご自身をささげられたことを知ったからです。けれども、自分が持っているものを調べても、主にふさわしいささげものを見いだせないのではないかと彼は考えます。それでは、わたしは主に何をもって答えればよいだろうか。わたしがささげることができるもの、それは、いけにえでも、焼き尽くすささげものでもありません。…わたしの生涯全体です。だから詩編作者はこう言います。『わたしは救いの杯を上げる』。この杯とは、霊的な戦いの中で味わう苦しみであり、死に至るまで、罪に抵抗することです。さらに、それは、わたしたちの主が福音の中で教えておられる杯です。『父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください』。主はまた、弟子たちにこういわれました。『あなたがたは、このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか』。この杯は、明らかに、主が世の救いのために受けた死を表しています」(PG XXX, 109)。

第3週 土曜日 晩課 第3唱和

フィリピ 2:6-11 3

1、日曜日、前晩の祈りの際に、私たちはフィリピの信徒への手紙(2:6-11 参照)からとられた、簡潔ではありますが、深い内容をもったキリスト賛歌を唱えます。私たちはたった今聞いたこの賛歌の最初の部分(6-8 節参照)を考えてみたいと思います。この部分は、神のみ言葉が自分を「無にした」逆説を述べています。み言葉はその栄光を捨てて、人間の身分をとったからです。

この賛歌は、受肉して、十字架につけられるという、最も恥ずべきかたちで死んだキリストを、キリスト信者の生きた模範として示します。前の節で言われているように、キリスト信者は、「このことを心がけ」なければなりません。「それはキリスト・イエズスにもみられるもの」(5 節)だからです。すなわち、キリスト信者は、へりくだって、人のことを考え、自分を捨てて、寛大な心をもたなければなりません。

2、キリストが神的な本性と、神としてのあらゆる特権を持っていたことは、間違いありません。しかし、キリストは、このすべてを超えた存在のしかたを、権力や威光や支配を表すものとして考えたり、用いたりはしませんでした。キリストは、その神と等しい身分や、栄光ある御稜威(みいつ)や力を、勝利を得るための道具、自分がすべてのものから隔絶していることを示すしるし、敵を圧倒できる権能の表現として用いしなかったの

です。反対に、キリストは「自分を無にして」、徹底したしかたで、みじめで弱い人間と同じものになりました。キリストにおいて、神の姿(モルフェー)は人間の姿(モルフェー)のもとに隠れています。人間の姿とは、苦しみと、貧しさと、限界と死によって示される、私たちの現実にはほかなりません(7節参照)。

それゆえ、キリストが行ったのは、ギリシア・ローマ文化の神々が行うと信じられていたような、簡素な服装をまとうとか、姿を変えて現れただけでなく、人間となり、本当に私たちの一人となりました。神は、本当の意味で「わたしたちとともにおられる神」となられたのです。神は栄光の玉座から私たちをいつくしみ深いまなざしで見ておられるだけで満足できず、自ら人類の歴史の中に入ってこられました。そのために神は「肉」となりました。すなわち、時間と空間によって条件づけられた、こわれやすい存在となったのです(ヨハネ 1:14 参照)。

3, イエズスは罪を除いて、徹底的に、人間と同じ境遇に身を置きました(ヘブライ 4:15 参照)。そこから彼は、私たちの有限性と弱さを表す前線の地、すなわち死へと導かれました。しかしながら、死は、不可解な過程の結果でもなければ、目に見えない運命の結果でもありません。死は、イエズスが御父の救いの計画に忠実であることを選んだことから、もたらされたのです(フィリピ 2:8 参照)。

使徒パウロはさらに、イエズスが味わった死は、十字架上の死であったと述べています。すなわちそれは、最も卑しめられたかたちでの死でした。このような死を味わうことを通して、イエズスは、無残で屈辱的な最期を遂げなければならなかった人を含む、すべての人にとっての、真の意味での兄弟となろうと望んだのです。

しかし、まさにその受難と死によって、キリストは、御父のみ旨への自由で自覚的な従順をあかししました。ヘブライ人への手紙にこう言われている通りです。「キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました」(ヘブライ 5:8)。

ここでわたしたちは、受肉とあがないのための受難を中心とした、このキリスト賛歌の最初の部分に関する考察を、区切りたいと思います。これに続く部分、すなわち、十字架から栄光へと至る過越については、後の機会にもっと深く考察することになるでしょう。この賛歌の最初の部分の根本的な要素は、イエズスの思いを深く理解するようという招きであるように、私は思います。

イエズスの思いを深く理解するとは、権力や富や名声を人生の最高の価値と考えることではありません。そうしたものは、私たちの心の底からの渇きに最終的に応えるものではないからです。イエズスの思いを深く理解するとは、他者のために人生の重荷を担い、従順と信頼の心をもって天の御父へと心を開くことです。それは、御父に従うなら、自由になることを、私たちが知っているからにほかなりません。イエズスの思いを深く理解すること、それは、私たちがキリスト信者としての生活の中で、日々、行わなければならないことです。

4, この考察を、東方教会の伝統の偉大な証人である、テオドレトスの言葉をもって締めくくりたいと思います。テオドレトスは、5世紀の、シリアのキュロスの司教でした。「わたしたちの救い主の受肉は、人類への神のはからいの最高の実現を表しています。実際、天も地も、海も空も、太陽も月も星も、すべての目に見えるものも、目に見えないものも、これらすべての、ただみ言葉によって造られたもの、それどころか、神のみ旨に従ってみ言葉によって照らされたものは、神のはかり知れないいつくしみを示すことはあり

ません。それができるのは、神のひとり子、神と同じ本性のうちに存在するかた(フィリピ 2:6 参照)、神の栄光の反映、神の本質の現れであるかたです(ヘブライ 1:3 参照)。このかたは、初めに神とともにあり、神であったかた、このかたによって万物が造られたかたです(ヨハネ 1:1-3 参照)。しもべのかたちをとり、人間の姿で現れた彼は、その人間の姿によって人間とみなされ、地上で生き、人と関わり、わたしたちの弱さを担い、わたしたちの病をその身に負われました(『神のはからいについての講話』10:Collana di Testi Patnistici, LXXV, Roma 1988, pp. 250-251)。

キュロスのテオドレトスは、続く考察において、フィリピの信徒への手紙の賛歌で強調された、イエズスの受肉と人間があがないの間の密接な関係に光を当てます。「造り主は、知恵と正義をもって、わたしたちのために救いのわざを行われました。神は、ただその力だけを用いて、わたしたちに賜物として自由を、惜しみなく与えようとは望まれませんでした。また神は、不公平に憐れみを与えたと言われないように、人類に属する者に、ただ憐れみだけを与えることも望まれませんでした。そのため神は、人間に対する愛に満ちていながら、同時に正義にかなった方法を考え出されました。実際、神は自ら人間の弱い本性と一つになることによって、この本性を戦いへと導き、敗北を取り返すように促します。それは、よこしまなしかたで勝利を得た敵を打ち負かし、人を容赦なく奴隷としていた圧政から人を解放し、人間に本来の自由を回復するためでした」(ibid. pp. 251-252)。

第3週 月曜日 晩課 第3唱和

エフェソ 1:3-10 3

親愛なる兄弟姉妹の皆様。

1, 今日、朗読されたのは、詩編ではなく、エフェソの信徒への手紙(エフェソ 1:3-14 参照) からとられた賛歌です。この賛歌は、週日のすべての月曜日の晩の祈りで用いられます。この賛歌は、父である神にささげられた祝福の祈りです。賛歌は、順々に、キリストのわざを通して実現された救いの計画のさまざまな段階を述べていきます。

祝福の中心で用いられているのは、ギリシア語の「ミステーリオン(神秘)」という言葉です。この言葉は、通常、啓示することを表す動詞(「啓示する」「知らせる」「明らかにする」とともに用いられます。実にこの神秘は、偉大な計画として、世の初めから父の内に秘められていました(9節参照)。父はこの計画を、御子イエズス・キリストによって「時が満ちれば」(10節参照) 実現し、啓示しようとお決めになりました。

この計画が実現される段階を、賛歌は、神がキリストによって聖霊のうちにを行う救いのわざとして述べています。まず父は—これが最初のわざですが—、世の初めから、私たちが愛して、聖なる者、汚れのない者にしようと、私たちをお選びになりました(4節参照)。それから神は、私たちが神の子にしようと、前もってお定めになりました(5-6節参照)。さらに神は、私たちがあがない、私たちの罪をゆるされました(7-8節参照)。神は、キリストのうちに救いの神秘をすべて私たちに知らせてくださいました(9-10節参照)。最後に、神は、私たちが永遠から約束されたものの相続者とされました(11-12節参照)。そのために神は、終わりの日の復活を仰ぎ見るための保証として、聖霊の

たまものを、前もって私たちに与えてくださいました(13-14節参照)。

2, それゆえ、この賛歌が次々と述べる救いの出来事は、たくさんあります。この出来事は、至聖なる三位一体の三つの位格によって行われます。まず、わざを始められるのは、父です。父は、救いの計画の創始者であり、最高の実現者だからです。賛歌は御子に目をとめます。御子は、歴史の中でこの計画を実現するからです。最後に聖霊が、すべての救いのわざに「証印」を押します。ここでは、最初の二つの段階について、簡単に考えてみたいと思います。すなわち、私たちが聖なる者とされたことと、神の子とされたことです(4-6節参照)。

キリストによって啓示され、実現された、神の最初のわざは、信じる者を選んだことです。この選びは、神の自由で無償のたまものとして与えられました。初めから、それゆえ「天地の造られる前から」(4節)、神の永遠の初めから、神の恵みが実現される用意はできていました。この真理を黙想する時、私は感動を覚えます。永遠の初めから、神は私たちに目を注ぎ、私たちを救おうと決めておられたのです。神のこの招きが求めている内容は、私たちの「聖性」です。「聖性」とは、なんと偉大な言葉でしょうか。聖性とは、純粹に神の存在にあずかることです。そして、私たちは神が愛であることを知っています。それゆえ、純粹な意味で神にあずかるとは、神の「愛」にあずかることにほかなりません。すなわち、「愛」である神に似せて、私たちが形作られることにほかなりません。

「神は愛です」(一ヨハネ 4:8, 16)。この真理は私たちに慰めます。この真理によって、私たちはまた、「聖性」が私たちの生活とかけ離れた現実ではないこと、それどころか、私たちが神を愛する者となることができればできるほど、私たちが「聖性」の神秘に入るということを、理解することができるからです。こうして、「アガペー(愛)」は、私たちの日々の現実となります。それゆえ、私たちは、神ご自身の、聖なる、生きたあり方へと招かれているのです。

3, そこから私たちは、神が同じように永遠の初めから計画しておられた、次の段階へと進みます。すなわち神が、私たちを神の子として「初めから定めておられた」ということです。私たちは、人間として造られただけでなく、神の子として、ほんとうの意味で神に属する者なのです。

パウロは別の箇所(ガラテヤ 4:5、ローマ 8・15, 23 参照)、この、神の子とされるという最高のあり方をたたえています。私たちが神の子とされたのは、私たちがキリストの兄弟とされたことに基づきます。キリストは最高の意味での子、すなわち、「多くの兄弟の中で長子となられた」(ローマ 8・29) 方だからです。また、私たちが神の子とされたのは、天の父と親しく交わることができるようになったことにも基づいています。私たちは今や、天の父を、「アッバ、父よ」と呼ぶことができるからです。すなわち、天の父を、真の意味での神への親しみを表しながら、心から愛をこめて「愛する父」と呼ぶことができるからです。ですから、私たちは途方もなく大きなたまものを与えられています。このたまものは、神から「み心のままに(愛によって)」、「恵み」としてのみ、初めて与えられることができたものです。「み心のままに」と「恵み」は、救いをもたらす愛をはっきりと表す言葉です。

4, 終わりに、ミラノの偉大な司教である、聖アンブロジオの言葉に耳を傾けたいと思います。アンブロジオは、一つの手紙の中で、使徒パウロのエフェソの信徒への手紙の

この箇所について注解を加え、ここで取り上げたキリスト賛歌の豊かな内容を正確に考察しています。アンブロジオが何よりも強調しているのは、神がキリスト・イエズスによって私たちを神の子としてくださったという、あふれるほど豊かな恵みです。「それゆえ、体が頭に結ばれていることは、疑う余地がありません。なぜなら、私たちは初めから、イエズス・キリストによって、神の子となるように前もって定められていたからです」(『イレネウスへの手紙 16』4: Sancti Ambrosii episcopi Mediolanensis opera, XIX, Milano-Roma, 1988, p. 161)。

ミラノの聖なる司教は、続けて次のように考えを述べています。「万物の造り主である神おひとり以外に、誰を豊かな者と言うことができるでしょうか」。それからアンブロジオはこうしめくくります。「しかしながら、神はあわれみにおいていっそう豊かな方です。神は、肉の本性に従えば、神の怒りを受けるべき者であり、罰を受けるほかない者だった私たちを、あがない、作り変えて、平和と愛の子らとなるようにしてくださったからです」(同7: ibid., p. 163)。

第3週 火曜日 晩課 第1唱和

詩編 125

1, ヴァッレ・ダオスタでの私の休暇が終わり、私たちはまた、この集いをもって、晩の祈りの旅を続けます。今日、私たちが取り上げるのは、詩編 125 です。この詩編は、「都に上る歌」として知られる、情熱的で意味深い詩編集の一部をなしています。「都に上る歌」は、神殿で主に見(まみ)えることを願ってシオンに上る巡礼者のための優れた小祈祷書です(詩編 120-134 参照)。

私たちは今日、簡単に、この知恵に満ちたテキストを考察してみたいと思います。このテキストは、主に信頼することへの招きであり、短い祈りを含んでいます(詩編 125:4 参照)。

詩編の冒頭は、「主に信頼する人」は揺るぐことがないと述べています。「主に信頼する人」は、揺るぎなく据えられた「シオンの山」にたとえられます。シオンの山は「揺るぐこと」がないからです。このような揺るぎなさが、神の現存にふさわしいものであることは明らかです。別の詩編が述べているように、神は「岩、砦(とりで)、救い」「身を避ける岩」「たて、やぐら、救いの力」(詩編 18:3 参照) だからです。

信じる者は、たとえ自分が独りきりだと感じ、さまざまな危険や敵意に取り囲まれていても、その信仰は変わることがありません。主がいつも私たちと共にいてくださり、主の力が私たちを包み、私たちを守ってくださるからです。

預言者イザヤも、彼が聞いた、神が信じる者に向けて語られた言葉をあかしして、こう述べています。「私は1つの石をシオンに据える。これは試みを経た石、堅く据えられた礎(いしづえ)の、貴い隅の石だ。信じる者は慌てることはない」(イザヤ 28:6)。

けれども、詩編作者は続けて言います。信じる者の信仰の中心をなしている信頼はそれ以上の支えを与えられています。主は、その民を守るために、いわば砦を作ります。それはちょうどエルサレムを囲む山々が、自然の要塞をなしているのと同じです(詩編

125:2 参照)。ゼカリヤの預言では、神はエルサレムにこう言っています。「私自身が町を囲む、火の城壁となる。…私はその中にあって栄光となる」(ゼカリヤ 2:9)

このような深い信頼と信仰のうちに、詩編作者は「心の正しい人」すなわち信じる者に、安心するようにと呼びかけます。信じる者を取り巻く状況そのものは、苦悩に満ちています。よしまな者がほしいままに力を振るって、その支配を及ぼそうとしているからです。

正しい人も、大きな苦しみに遭うことを避けるために、悪と共謀する誘惑にさらされることがあります。しかし、主は彼らを迫害から守ってくださいます。

主は、「悪の力が神に従う人の土地にはびこ」(詩編 125:3) ることのないように、同時に、主に従う人を、悪に手を伸ばす誘惑から、守ります(同参照)。

このようにして、この詩編は深い信頼を心に植えつけます。それは、困難な状況に直面した時の力強い助けとなります。信じる者が味わう、孤立、皮肉、侮辱といった外的な危機は、失望、劣等感、倦怠といった内的な危機と結びつくからです。私たちもこのような状況に陥ることかあります。しかし、詩編は私たちに、信頼していれば、私たちはこれらの悪に打ち勝つことができることを教えます。

3, 詩編は終わりに、神「に従う人、心の正しい人」のために主に祈りをささげ(4 節参照)、「不正な道を走る者」、「滅びへの道を歩む者」の不幸について語ります(5 節)。

一方で、詩編作者は、正しい者、信じる者に、恵み深い父としての姿を現してくださるようにと、主に願います。彼らは、正しい生活と清らかな良心のたいまつを、高く掲げるからです。

他方で、詩編作者は、不正な道を走る者に、主が正しい裁きを下さすようという希望を表明します。悪の道は、ついには死をもたらすからです。

この詩編は、伝統的な祝福のあいさつで結ばれます。「イスラエルの上に平和」。この祝福のあいさつ(シャローム)は、「エルサレム(エルーシャライム)」(2 節参照)と韻を踏んでいます。エルサレムは、平和と聖性の象徴だからです。

この祝福のあいさつは、希望を表す祈りとなります。私たちは聖パウロの言葉によって、それを説明できます。「神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように」(カラテヤ 6:16)。

4, この詩編についての注解の中で、聖アウグスチヌスは、「不正な道を走る者」を、神から迷い出すことの決してない、「心の正しい人」と比べています。「不正な道を走る者」が「悪を行う者」と運命を共にするのなら、「心の正しい人」の運命は、いかなるものとなるのでしょうか。聖アウグスチヌスは、自分の聴衆とともに、自分もこのような人々の幸いな運命にあずかれることを希望しながら、こう問いかけます。「私たちは何を与えられるのでしょうか。私たちの受け継ぐものは何でしょうか。私たちの帰るところはどこでしょうか。それはどのように呼ばれるのでしょうか」。

それから、アウグスチヌスは、その名前を示しながら、こう答えます。私はそれを自分の言葉としたいと思います。「それは平和です。私たちは平和を願いながら、皆さんを祝福します。私はあなた方の上に平和を告げ知らせます。山々に平和が与えられ、丘々が正義で満たされますように(詩編 72:3)。今や、私たちの平和はキリストです。『実に、キリストは私たちの平和であります』(エフェソ 2:14)』(『詩編注解』4: Nuova Biblioteca Agostiniana, XXVIII, Roma, 1977, p. 105)。

聖アウグスチヌスは、終わりに、願いをこめて、次の勧告を述べています。「私たちは神のイスラエルです。私たちを平和にしっかりと結びつけようではありませんか。エルサレムは平和を見るという意味だからであり、私たちはイスラエルだからです。イスラエルの上に平和」。そして、平和とはキリストです。

第3週 火曜日 晩課 第2唱和

詩編 131

1, 今日、朗読されたのは、詩編 131、ヘブライ語原文で約 30 語にすぎない短い箇所です。けれども、この箇所は重要です。それは、あらゆる宗教文学に見られる主題を含んでいるからです。すなわち、「霊的な幼子」という主題です。私たちは自然に、リジューの聖テレーズ（幼いイエズスの聖テレジア）とその「小さい道」、イエズスの腕に抱かれるために「小さなものにとどまる」という彼女の思想を思い起こします（『自叙伝』原稿 C、2r-3v: Opere complete, Citta del Vaticano, 1997, pp. 23F236）。

実際、この詩編の中心で述べられる、母と幼子というはっきりとした表現は、神の優しい母としての愛を表しています。預言者ホセアがすでに次のように述べている通りです。「まだ幼かったイスラエルを私は愛した。……私は人間の綱、愛のきずなで彼らを導き、彼らの顎（あご）からくびきを取り去り、身をかがめて食べさせた」（ホセア 11:1, 4）。

2, この詩編は、初めに幼子とまったく反対の態度を述べます。幼子は、自分の弱さを知っているため、人の助けに頼ります。その反対に、詩編で描かれるのは、おごった心、尊大に高く見上げるまなざし、そして、「偉大なこと」、「身にあまること」です（詩編 131:1 参照）。ここで述べられているのは、「傲慢」や「尊大さ」を表すヘブライ語で語られる、傲慢な人であり、また、他人を見下し、人を自分より劣ったものとみなす人の尊大な態度です。

人には、神のようになって、善と悪を知るものになりたいという、傲慢への強い誘惑があります（創世記 3:5 参照）。唯一の主に対して謙遜に心から信頼を置くことを選んだこの祈りの人は、このような誘惑を決定的に退けるのです。

3, こうして、私たちは、母と幼子という、忘れがたい表現に至ります。ヘブライ語の原文が言っているのは、乳児ではなく、「乳離れした」子どもです（詩編 131:2 参照）。ところで、古代中近東では子どもの正式な乳離れを特別に祝うことが知られています。この祝いは、通常、約 3 歳のときに行われます（創世記 21:8、サムエル記上 1:20-23、マカバイ記二 7:27 参照）。

そこで、詩編作者が述べる幼子は、いまや個人的かつ親密なきずなによって母親と結ばれることとなります。幼子は、ただ身体的な接触や、食事を与える必要だけによって母親と結ばれているのではないからです。このきずなは、より意識的に結ばれたきずなです。そのきずなは、直接に、心から結ばれています。それは、まことの意味での「幼子」の心を表す、この上なく優れた表現です。「幼子」は、盲目的かつ自動的にではなく、落ち着いて、責任をもって、自らを神に委ねるのです。

4, このことから、祈る人の「わたしはいこう」という宣言は、全共同体にまで広げら

れます。「イスラエルよ、神を待ち望め。今より、とこしえに」(詩編 131:3)。神から安らぎといのちと平和を与えられた民全体において、いまや希望は花開き、現在から未来へと広がります。「今より、とこしえに」。

この祈りに、同じ神への信頼に基づいて語る、他の詩編の言葉を補うことは、簡単です。「母の胎にいた時から、あなたはわたしの神」(詩編 22:11)。「父、母に見放されても、あなたはわたしを迎えてくださる」(詩編 27:10)。「主よ、あなたは私の希望。神よ、あなたはわたしの若い時からのささえ、母の胎より生まれた時からあなたはわたしのよりどころ」(詩編 71:5-6)。

5,すでに述べたように、謙遜に示される信頼は、傲慢の反対です。4世紀のキリスト教著作家であるヨハネス・カッシアヌスは、傲慢の悪徳について、信者にこう警告しています。「傲慢の悪徳は、すべての徳を破壊します。傲慢は、生ぬるく弱い人を襲うだけではありません。傲慢がとりわけ襲いかかるのは、頂上に上ろうと努める人です」。カッシアヌスは続けてこう述べています。「だから、聖なるダビデはその心を細心の注意をもって守ろうとしたのです。ダビデはついに、自分の良心の秘密のいかなるものもその前で隠すことのできない方に、こう告白するに至ります。「神よ、わたしはおごらず、高ぶらず、偉大なこと、身にあまることを求めようとしない」。……けれども、ダビデは、完全な人にとってさえ、そのように自らを守ることがどれだけむずかしいかを知っていました。それで彼は、自分の力だけに頼ろうとは思いませんでした。かえって、敵の矢に当たらず、敵の矢に傷つけられずにすむように、自分を助けてくださるよう、主にこう祈り求めたのです。「思い上がる者の足でわたしを踏みつけ」(詩編 36:12) ないでください、と。」(『共住修道制規約』 12・6 :Le istituzioni cenobitiche, Padova, 1989, p. 289)。

同様に、ある無名の砂漠の師父の次のような言葉が伝えられています。この言葉にも、詩編 131 がこだましているのが認められます。「私はけっして自分の地位を越えたところへと歩もうとしたことはない。また私は辱められることを気にとめたこともない。なぜなら、私は一つのことだけを考えているからだ。この老人である私を取り去るように、主に祈るということだけを」(『砂漠の師父の言葉』:I Padri del Deserto. Detti, Roma, 1980, p. 287)。

第3週 水曜日 晩課 第1唱和

詩編 126

1, 詩編 126 のことばを聞くと、イザヤ書の第2部で歌われている、「新しい出エジプト」の出来事を目の当たりにしているような印象を受けます。「新しい出エジプト」とは、前538年のベルシア王キュロスの勅令に従って、イスラエルが、捕われていたバビロンから父祖の地に帰還したという出来事です。こうしてイスラエルは、ヘブライ人がエジプトでの奴隷状態から解放された、最初の出エジプトの喜びを再び経験しました。

この詩編は、イスラエルが再び試練を受け、脅威と恐れにさらされている日々歌われるとき、特別な意味をもつものとなりました。実際、この詩編には、このような試練

に遭っている捕われ人が連れ帰られることを求める祈りが含まれています（4節参照）。それゆえ、この詩編は、歴史を旅する神の民の祈りです。神の民は、多くの危難と試練に遭いながら、常に心から神を信頼しています。神は救い主、解放者として、弱い者、抑圧された者を支えてくださるからです。

2, この詩編には、喜びを味わう人物が登場します。彼は解放されたことを喜んで笑い、舌で喜びの歌を歌います（詩編 126:1-2 参照）。

自由が回復されたことに対して、ここでは二つの反応が示されています。まず、異教の国々が、イスラエルの神の偉大さを認めます。「神は彼らに偉大なわざを行なわれた」（詩編 126:2）。選ばれた民の救いは、神が現実にも力強く存在する方であり、歴史の中で民とともにあって働く方であることを、はっきりと証明するからです。他方で、神の民は、自分たちを救う主に対する、彼らの信仰を告白します。「神はわたしたちに偉大な業を行われた」（詩編 126:3）。

3, それから、思いは過去に向かい、恐れと苦難に震えていた日々が思い起こされます。わたしたちは、詩編作者が、農業からとられたたとえを用いていることに注意したいと思います。「涙のうちに種を蒔く人は、喜びのうちに刈り取る」（詩編 126:5）。重い労苦を担う人の顔は、涙に濡れることもあります。労苦して種を蒔いても、それが無駄になり、失敗に終わることがあります。しかし、豊かな実りを得て喜ぶとき、労苦が無駄でなかったことがわかります。

詩編のこの節には、大きな教訓が凝縮されたかたちで示されています。それは、苦しみが実り豊かないのちを含むという神秘を語るのです。イエスが、受難と死に向かうときに、こういわれた通りです。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」（ヨハネ 12:24）

4, こうして詩編は、収穫の祭りを待ち望みます。収穫の祭りは、神の祝福によってもたらされる、自由と平和と富から生まれる喜びを表します。それゆえ、この詩編の祈りは、希望の歌だということができます。試練と恐れ、外からの脅威と内からの苦悩にさらされた時に、人はこの希望を頼みとしなければなりません。

同時に、この詩編をもっと広い意味で、信頼のうちに日々を送り、自らの選んだ道を歩むようにという呼びかけと考えることもできます。誤解や反対に遭っても、忍耐して善い業を行い続けるなら、かならずや光と実りと平和へと導かれるのです。

聖パウロがガラテヤの信徒に思い起こさせたのも、まさにこのことでした。「霊に蒔く者は、霊から永遠のいのちを刈り取ります。たゆまず善を行いましょう。飽きずに励んでいれば、時が来て、実を刈り取ることになります」（ガラテヤ 6・8-9）。

5, 終わりに、聖ベーダ・ヴェネラビリス（672/3-735年）が詩編 126 について行った考察に耳を傾けたいと思います。ベーダはそこでイエズスの言葉を注解しています。イエズスは、弟子たちに向かって、彼らがやがて悲しみを味わうこと、また、同時に、その悲しみから喜びが湧き出ることを告げました（ヨハネ 16:20 参照）。

ベーダはこう述べます。「キリストを愛していた者たちは泣き悲しみました。彼らは、キリストが敵に連れ去られ、縛られ、裁きかけられ、罪に定められ、鞭打たれ、あざけられ、ついに十字架につけられ、槍で刺し貫かれ、葬られたのを見たからです。逆に、世を愛していた者たちは喜びました。彼らは、自分たちが見るだけでも不快に感じた者を、恥ずべき死に定めたからです。弟子たちは主の死によって悲しみに沈みましたが、

主の復活を知ると、彼らの悲しみは喜びに変わりました。それから、彼らは昇天の奇跡を目にして、いっそう大きな喜びに満たされながら主をほめたたえました。福音書記者ルカがあかししている通りです（ルカ 24:53 参照）。けれども、これらの主の言葉は、すべての信者にあてはまるものです。信者は、世について嘆き悲しみながら、永遠の喜びに達することを求めています。また、彼らは今は当然のことながら泣き悲しんでいます。なぜなら、彼らは自分たちが愛している方をまだ見ることができないからです。そしてまた、彼らは肉体のうちに生きているあいだは、自分たちの故郷である神の国から離れるかに離れたところにいることを知っているからです。けれども彼らは、労苦と苦しみを通じて、自分たちが賞を得られることを確信しています。彼らの悲しみは喜びに変わります。彼らはこの世での苦しみを終えて、永遠のいのちの報いを得るからです。詩編がこう述べている通りです。「種を手に涙を流して出て行く人は、束を抱え、喜びにあふれて帰ってくる」（「福音書説教集」2:13: Collana di Testi Patristici, XC, Roma, 1990, pp. 379-380）。

第3週 水曜日 晩課 第2唱和

詩編 127

1, 今朗読された詩編 127 は、私たちの目の前に生き生きとした光景を示します。建築中の家。見張りに守られた町。家庭生活。夜回り。日々の仕事。生きることのささやかな秘密と大きな秘密。しかしながら、それらのすべてを超えて、決定的なのは、私たちとともにいてくださる主です。主は人のわざを見守っているからです。詩編冒頭の鋭い言葉がこう述べている通りです。「神によって建てられるのでなければ、家を建てる人の骨折りはむなしい」（1 節）。

実に社会は、その社会を構成するすべての人が関わることによって、堅固なものとなります。けれども、社会は神からの祝福と支えとを必要としています。その神が、しばしば社会から締め出され、ないがしろにされているのは不幸なことです。箴言は、共同体の善益を作り出すのが、何よりも神のわざであることを強調しています。そのことを、確言は徹底的なしかたで、こう述べています。「人間を豊かにするのは神の祝福である。人間が労苦しても何も加えることはできない」（旅言 10:22）。

2, この知恵に満ちた詩編は、日常生活の現実の考察から生まれたものです。この詩編は基本的に次の対比から成っています。主がともにいなければ、堅固な家を建てようとしても、安全な町を作ろうとしても、労苦して実りを得ようとしてもむなしい（詩編 127:1-2 参照）。これに対して、主がともにいてくだされば、人は財産と実りを得、子だくさんで静かな家庭に恵まれ、十分に守られた町に住み、常に心配したり不安でいたりしないですみます（3-5 節参照）。

詩編のテキストはまず、主が、家を建てる者、町を見守る見張りだと述べます（詩編 121:1-8 参照）。人は、朝、出かけていって、勤勉に働きます。それは、自分の家族を養い、社会の発展に役立つためです。人は、労苦して、顔に汗を流し（創世記 3:19 参照）、一日中働きます（詩編 127:2 参照）。

3, ところで、詩編作者はためらうことなくいいます。もし神が働く人とともにいてくださらなければ、これらすべての労苦はむなしいと。反対に、詩編作者は、神が自分の友に眠りまでも与えると述べます。ゆえに、詩編作者は、まず神の恵みが先立つことをたたえたいのです。人のわざは限界があり、移ろいやすいものです。にもかかわらず、神の恵みは、この人のわざを堅固で価値あるものとし、自らの自由を、落ち着いた信仰をもって主にささげることによって、私たちの仕事も、堅固なものとなり、尽きることのない実りをもたらします。それで、私たちの「眠り」も、祝福された、神が与えた安息となります。この「眠り」が、堅固で意味をもった活動を締めくくるからです。

4, そこから私たちは、この詩編が述べているもう一つの情景に目を向けます。主はたまものとして子どもたちを与えます。子どもたちは、祝福と恵みであり、いのちの継承のしるし、また、次の世へと続く救いの歴史のしるしだからです(3節参照)。とりわけ詩編作者は「若い時に生まれた子」をたたえます。若くして子を得た父は、その子らが成長するのを見届けるだけでなく、年老いたときに彼らに助けてもらえるからです。それで、父は将来について安心していることができます。父は、鋭い、勝利をもたらす「矢」、すなわちその息子たちで武装した戦士のようになるからです。

詩編が、当時の文化からとられた、こうしたたとえを用いたのは、多くの家庭の安全と堅固さと力とをたたえるためです。このテーマは次の詩編 128 でも繰り返されます。詩編 128 は、幸福な家庭について述べるからです。

詩編は最後に、子らに囲まれた父の姿を述べています。この父は、町の門、すなわち公共生活の中心で、尊敬をもって迎えられます。したがって、子を産むことは、いのちと、社会の善益をもたらすたまものです。私たちは現代、そのことを自覚しています、私たちは、多くの国々が、人口の減少によって、子どもたちが体現するはずの生气と活力と未来を失うのを目にしているからです。けれども、私たちとともにいてくださる聖なる神は、それらすべてを超える方です。神はいのちと希望の源だからです。

5, まさにこの神が私たちとともにいてくださることをたたえるために、詩編 127 はしばしば、霊的著作家たちに用いられてきました。神が私たちとともにいてくださることが、いつくしみと神の国への道を歩むうえで、決定的に重要だからです。そこで、修道士イザヤ(491年にガザで没)は、その『アスケティコン』(講話4・118)のなかで、古代の父祖や預言者の模範を思い起こしながら、こう教えています。「この人々は自分を神の保護に委ねた。彼らは神が守ってくださるよう祈り求め、自分たちが行ういかなるわざにも頼ることをしなかった。彼らにとって、神が守ってくださることは、固く守られた町のようにであった。なぜなら彼らは、神の助けがなければ自分たちが何もできないことを知っていたからである。そこで彼らの謙遜は、詩編作者とともに彼らにこう言わせたのであった。『神によって建てられるのでなければ、家を建てる人の骨折りはむなしい。神によって守られるのでなければ、町を守る人の警戒はむなしい』(『修德的著作集』:Recueil

ascetique, Abbaye de Bellefontaine, 1976, pp. 74-75)。

コロサイ 1:12-20

1,すでに私たちは、宇宙と歴史の主としての、キリストの崇高な姿について考察しました。このようなキリストの姿が、聖パウロのコロサイの信徒への手紙の冒頭に置かれた賛歌でも、その主題をなしています。この賛歌は4週間の晩の折りのどの週においても唱えられます。

この賛歌の中心は、15-20節から或る部分です。この部分で、キリストは、直接かつ荘厳なしかたで登場します。キリストは「見えない神」の「姿」として述べられています(15節)。ギリシア語の「エイコーン(姿)」は、使徒パウロがよく用いる言葉です。パウロはその手紙の中でこの言葉を9回用いています。「エイコーン」は、キリストを指して用いられることもあります。キリストは神の完全な似姿だからです(ニコリント4:4参照)。また、人間(男)を指して用いられることもあります。人間は神の姿と栄光を映すものだからです(一コリント1:7参照)。しかしながら、人間は、罪によって、「滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間に似せた像と取り替えたのです」(ローマ1:23)。人間は、偶像を拝むことを選び、偶像に似たものとなったからです。

それゆえ私たちは、自分たちの姿を、常に神の子の姿に似せて造り変えていかなければなりません(ニコリント3:18参照)。なぜなら、私たちは「やみの力から救い出され、「愛するひとり子の国に移して」いただいたからです(コロサイ1:13)。

2,次に、キリストは「すべてのものに先だって生まれた方」(15節)だと宣言されます。キリストはすべての被造物より先におられ(17節参照)、世々に先だって生まれました。だから、「すべては子によって造られた。すべてのものは子のためにある」のです(16節)。古代ユダヤ教の伝承でも、「全世界はメシア(救い主)によって造られた」と述べられています(ミシュナ・サンヘドリン98b)。

使徒パウロにとって、キリストは、万物を結びつけるための原理であり(「すべてのものは御子によって支えられています」)、仲介者であり(「御子によって」)、全被造物が一つに集められる最終目標です。キリストは「多くの兄弟の中で長子となられ」た方です(ローマ8:29)。すなわち、キリストは、神の子から成る大家族における、最高の意味での子なのです。私たちは、洗礼によってこの大家族の中に導き入れられます。

3,そこから、私たちは、被造物の世界から歴史の世界へと目を移します。キリストは「すべてにおいて頭となる」(コロサイ1:18)。しかもキリストは、その受肉を通して、すでに教会のかしらとなっておられました。実にキリストが人類という共同体に入ってきたのは、人類を統治し、一つの「からだ」に作り上げるためでした。すなわち、人類を、調和があり、実りをもたらす一致へと導くためでした。人類が一致し成長するための基盤は、キリストにあります。キリストは、生けるかなめ、「初めの者(アルケー)」だからです。

キリストは、まさにこのような第一の者であるがゆえに、すべての人の復活の根拠とすることができるのです。キリストは「死者のうちから最初に生まれた方」です、なぜなら、「キリストによってすべての人が生かされることになるのです。…最初にキリスト、次いで、キリストが来られるときに、キリストに属している者たち」(一コリント15:22-23)。

4, 賛歌は、締めくくりに、「あふれさせる」もの（ギリシア語で「プレーローマ」）をたたえます。この「あふれさせる」ものを、キリストはご自身のうちに、御父の愛のたまものとして宿しています。この満ちあふれる神性は、世界の中でも、人類の中でも輝きます。そしてそれは、平和と一致と完全な調和を築く源泉となるのです（コロサイ 1:19-20）。

このような「和解させ」、「平和を打ち立て」るわざを可能にするのは、「十字架の血」です。私たちは、この十字架の血によって、正しく、聖なる者とされるからです。キリストは、ご自身の血を流し、ご自身をささげることによって、あまねく平和をもたらしました。聖書の用語では、この平和は、救い主が与えるたまものを一言でまとめたものであり、全被造物へと広がる満ち満ちた救いにほかなりません。

それゆえ賛歌は終わりに、和解と一致、調和と平和への輝かしい希望を語ります。この平和を打ち立てるために、キリストは荘厳な姿で立ち上がります。キリストは御父の「愛する御子」だからです。

5, 古代キリスト教の伝統の中で、作家たちはこの意味深い賛歌を考察してきました。アレキサンドリアの聖チリロはある無名の質問者との問答の中で、このコロサイの信徒への手紙の賛歌を引用しています。質問者はチリロにこう問いかけます。「では、父なる神からの言（ロゴス）自身がわれわれのために肉において苦しんだと、われわれはいったらよいのか」。

チリロは、コロサイの信徒への手紙の賛歌を引用しながら、「その通りである」と答えます。実際、チリロはこう述べています。「見えない神の像、見えるものと見えないもの、すべてのものが造られる前に生まれた方、万物が彼を通して、彼のために造られた方が、教会の頭として与えられ、彼が死者の中から最初に生まれた者であると、[パウロは]言う」。すなわち、キリストは、死んで復活する者の中で、最初に復活した方だからです。チリロは続けて述べます。「彼は、自分の肉から来るものをすべて自分のものとし、『恥をもいとわないうで十字架の死を耐え忍んだ』（ヘブライ 12・2）のである。実に、[主との] 結合によって名誉を与えられた一どのようにしてかは私にはわからないが一単なる人間がわれわれのためにささげられたと我々は言わない。十字架に付けられた者は栄光の主自身である」（『キリスはひとりであること』:Collana di Testi Patristici, XXXVII, Roma, 1983, p. 101 [邦訳、小高毅訳、『中世思想原典集成3 後期ギリシア教父・ビザンティン思想』平凡社、1994年、207-208頁]）。

主の栄光は、御父の最高の愛のしるしです。この主の栄光を前にして、私たちも讚美の歌をささげ、ひれふして主を拝み、主に感謝をささげようではありませんか。

第3週 木曜日 晩課 第1唱和

詩編 132 前

1, 今日、朗読されたのは、詩編 132 の前半部分です。この賛歌は、晩の祈りの中で、2つに分けて用いられます。多くの学者は、この歌が、主の箱（契約の櫃）をエルサレムに運ぶ、荘厳な典礼の中で唱えられたものだと考えています。主の箱は、イスラエル

の民のただ中に神がおられることのしるしです。エルサレムは、ダビデが選んだ新しい都でした。

この出来事について、聖書はこう述べています。「主の御前でダビデは力のかぎり踊った。彼は麻のエフェドを着けていた。ダビデとイスラエルの家はこぞって喜びの叫びをあげ、角笛を吹き鳴らして、主の箱を運び上げた」(サムエル記下6・14-15)。

一方、別の学者たちは、詩編132を、シオンの聖所での典社が確立した後に行われた、この古代の出来事を記念する祭儀と関係づけます。もちろん、このシオンの聖所を建てたのは、ダビデです。

2, 今日の賛歌は、典礼の要素を含んでいるように思われます。おそらくこの賛歌は、行列を行う中で用いられたものでした。行列の中には、祭司と信者かおり、聖歌隊も参加しました。

晩の祈りに従って、今日の解説は、今朗読された、前半の10節までにしたいと思えます。この部分の中心をなしているのは、ダビデが行う荘厳な誓いです。実際、ダビデは、自分の前任者であるサウル王との苦しい戦いの後、「主に誓い、ヤコブの勇者である神に願をかけました」(詩編132:2)。3-5節に示される、この荘厳な誓いの内容は、はっきりしています。それは、まず主の箱がいますところを定めるまでは、王はエルサレムの王宮に入らず、静かに休むこともしない、というものでした。

それゆえ、社会生活の中心には、すべてを超える神の神秘を思い起こさせるための場がなければなりません。神と人間は、ともに歴史の中を歩みます。神殿は、この神と人間の交わりを目に見える形で示す役割を担います。

3, ダビデの言葉を述べた後、ここで過去の出来事が思い起こされます。おそらくこれは、典礼の聖歌の言葉に基づくものと思われます。主の箱は、エフラタの地であるヤアルの野で見いだされました(6節参照)。イスラエルは戦いの最中に主の箱を失いました。ペリシテ人がそれをイスラエルに返した後、主の箱は長くヤアルの野にとどまっていたのです(サムエル記上7:1、サムエル記下6:2, 11参照)。

そのため、主の箱は、エフラタ地方から将来の聖なる都へと移されます。今日の部分の最後では、そのことを祝う祭儀が行われます。祭儀の中には、まず、礼拝する民、すなわち会衆がいます(詩編132:7, 9参照)。また、この祭儀の中で、主は、シオンに置かれた主の箱のしるしとともに、その力ある姿を示します(8節参照)。

典礼の精神をなすのは、まず、このような司祭と信者の交わりであり、また、力ある主なのです。

4, 詩編132の前半は、王位継承者であるダビデをたたえる歓呼の祈りでしめくくられます。「神よ、しもべダビデに約束されたように、油注がれた王を退けないでください」(10節)。

この祈りは、元々、ユダヤの王を生涯の危難の中で支えてくださるようという祈願です。しかし、その中に、メシア(救い主)への待望を容易に読み取ることができます。実際、「油注がれた」という言葉は、ヘブライ語の「メシア」の訳です。こうして詩編作者のまなざしは、ユダ王国のもう一つの出来事へと向けられます。すなわち、それは、完全な意味での「油を注がれた者」への大きな期待となるのです。このメシアこそ、常に神の心に適い、神から愛され、祝福される者だからです。

5, この詩編の中にメシアへの待望を読み取ることは、キリスト教の聖書解釈でよく行

われています。また、このような解釈は詩編全体にまで拡大して行われました。

たとえば、エルサレムのエゼキアス（6世紀前半の司祭）が、8節をキリストの受肉にあてはめた解釈は重要です。『神の母についての第2の講話』の中で、エゼキアスは、おとめにこう呼びかけています。

「ダビデは、あなたと、あなたから生まれたかたについて、豎琴をかなでて歌い続けました。『神よ、あなたの安息のの地にお進みください。あなたの力、契約のひつとともに』（詩編 132:8）。「あなたの力、契約のひつ」とは誰でしょうか。エゼキアスは答えます。「それが神の母なるおとめであることは明らかです。なぜなら、あなたが真珠であるなら、おとめが箱であるのはふさわしいことです。あなたが太陽であるなら、おとめは天と呼ばれなければなりません。あなたが汚れのない花であるなら、おとめは枯れることのない草であり、不死の楽園であるはずです」（『第一千年期のマリア論文書集』：Testi mariani del primo millennio, I, Roma, 1988, pp. 532-533）。

第3週 木曜日 晩課 第2唱和

詩編 132 後

1, 今読まれたのは、詩編 132 の後半です。この歌は、イスラエルの歴史における重要な出来事を思い起こさせます。すなわち、契約の櫃をエルサレムの町に運んだ出来事です。

契約の櫃を運んだのが、ダビデであることは、この詩編の前半で述べられています。わたしたちがすでに考察した通りです。ダビデ王は、神の箱のために適当な場所を見いだすまで、自分は王宮に入らないという誓いを立てました。神の箱は、主がその民の中に現存するしるしだからです（3-5節参照）。

今や、神ご自身が、ダビデ王の立てた誓いに答えます。「ダビデに誓われたゆるぎない神の言葉」（11節）。この荘厳な誓いは、預言者ナタンが、神の名において、ダビデの将来の子孫に関してかつて行った預言と、実質的に同じものです。ダビデの子孫は、王国を揺るぎなく治めるよう定められました（サムエル記下 7・8-16 参照）。

2, 神の誓いは人間の参加を含んでいます。すなわちそれは「もし……なら」という仮定で条件づけられているからです。

「おまえの子らがわたしの示す契約と諭しを守れば」（詩編 132・12）。神の約束とたまものに対して、人間の側から、信者の応答と、積極的な忠実さが求められます。神の約束とたまものは、魔法のように与えられるものではないからです。そこでは、神の自由と人間の自由という、2つの自由が織り成す対話が行われるのです。

そこから、詩編は、主が与えるたまものと、イスラエルの忠実とがもたらす、信じられないほどの結果をたたえる賛歌となります。民は、神がともにいてくださることを体験しました（13-14節参照）。神は、エルサレムの住民の一人のようになったのです。あたかも神は、一市民のように、他の市民とともに歴史の出来事を経験します。しかも神は、力強い祝福を与えます。

3, 神は、収穫を祝福して、貧しい者に飽きるほどの糧を与えます（15節参照）。祭司

らには身を守る衣をまとわせて、救いを与えます。神はまた、すべての信じる者が平和と喜びのうちに生きることができるようになります (16 節参照)。

神の最高の祝福は、あらためてダビデとその子孫に与えられます。「わたしはダビデの家に力ある王を起し、油注がれた王の家のともしびを消さない。はむかう者を恥で満たし、輝く冠を王に授けよう」(17-18 節)。

詩編の前半と同じく (10 節参照)、もう一度、「油注がれた王」が登場します。「油注がれた王」は、ヘブライ語の「メシア」です。この言葉によって、ダビデの一族はメシアと結びつけられます。キリスト教の解釈では、メシアはキリストの姿のうちに実現します。ここではメシアの姿が生き生きと描き出されています。詩編は、ダビデを、力強く成長する芽だと述べます(新共同訳「ダビデのためにひとつの角を芽生えさせる」)。神は、ダビデの一族を明るい灯で照らします。灯は力と栄光のしるしです。輝く冠は、ダビデが敵に打ち勝つことを示します。それは、悪に対する勝利にはほかなりません。

4, エルサレムは、箱を守る神殿と、ダビデの王朝によって、主の現存を、場所的な意味と、歴史的な意味の、2つの意味で実現しました。こうして詩編 132 は、インマヌエルである神への賛美となります。神は、ご自身の造られたものとともに住み、彼らとともに生きて、彼らに恵みを与えます。それは、彼らが真理と正義のうちに神と結ばれているからです。それゆえ、この詩編は、その霊的な核心において、ヨハネに先駆けてこう告げ知らせます。「み言葉は肉になって、わたしたちの間に宿られた」(ヨハネ 1:14)。

5, 終わりに、私たちは、教父たちがしばしば、詩編 132 の後半の最初の部分を、聖なるおとめマリアの胎内にみ言葉が受肉したことを述べるために用いたことを思い起こしたいと思います。

聖イレネオ (エイレナイオス) 以来、おとめが男の子を産むというイザヤの預言に言及しながら、こう述べられてきました。「それゆえ、『ダビデの家よ聞け』(イザヤ 7:13) ということばは、神がダビデに『胎の実』から出ると約束した、かの永遠の王を示している。『胎の実』とは、身ごもったおとめを表すことばだからである。それゆえ聖書は……預言された『来るべきかた』がおとめから生まれることを述べ、また証言している。だからこそエリサベトは、聖霊に満たされて、マリアに香証しして言ったのである。『あなたは女の中で祝福されたかたです。胎内のお子さまも祝福されています』(ルカ 1:42)。こうして聖霊は、聞く耳を持つ人に、こう示したのである。すなわち、おとめが、言いかえれば、マリアが男の子を産むことによって、ダビデの胎の実から王を生み出すという、ダビデに対する神の約束が実現したということ」(『異端反駁』 3:21:5 : Gia e Non Ancora, CCCXX, Milano, 1997, p. 285)。

このようにして、私たちは、古代の詩編から主の受肉に至るまでの、長い時間を通して示された、神の真実と忠実さを知ります。詩編の中で、私たちの間に住むという神の神秘が示されました。この神秘は、受肉を通して、神が私たちの一人となることによって、輝き出しました。歴史が移り変わる中で示される、神の忠実さと、私たちの信頼は、私たちの喜びの源となるのです。

詩編 135 前

1, 今日読まれたのは、詩編 135 の前半です。これは典礼の性格をもった賛歌です。ここでは他の聖書のテキストが暗示されたり、思い起こされたり、引用されたりしています。実際、典礼の式文は、多くの場合、聖書の偉大な遺産に基づいて構成されています。聖書はさまざまなテーマと祈りを含んでおり、信者の歩みを支えてくれるからです。

私たちは前半の祈りを読みたいと思います（詩編 135:1-12 参照）。それは、主を賛美するようという、すべての民への強い招きです（1 - 3 節参照）。この呼びかけを受けるのは次の人々です。「わたしたちの神主の家の庭に立つ者よ」（1 - 2 節）。

それゆえ、私たちは、神殿で行われる、生き生きとした礼拝の雰囲気の中に置かれます。神殿は、共同で祈りをささげるための最高の場所だからです。私たちは神殿で、「わたしたちの神」がともにいてくださることを、はっきりとしたかたちで経験します。「わたしたちの神」は「恵み深」く、「うるわしい」神です。それは選ばれた民の神、契約を結ばれた神だからです（3 - 4 節参照）。

賛美への招きに続いて、一人の先唱者が信仰宣言を唱えます。この宣言は、「わたしは知っている」（5 節）という言い方で始まります。この信仰宣言は、賛歌全体の中核をなすものです。賛歌は、主が大いなる方であることを宣言します（同）。主の偉大さは、その驚くべきわざによって示されました、

2, 神はその全能の力を、全世界に示し続けます。「天と地、海とすべてのふちの上に」。神は雨雲を湧き上がらせ、稲妻を放ち、風を送り出します。風は「倉」すなわち風をためておくところにしまっていると考えられていました（6 - 7 節参照）。

しかし、何よりもこの信仰宣言の中でたたえられるのは、神のわざのもう一つのあり方です。すなわち、神が驚くべきしかたで歴史に介入するということです。この歴史の中で、造り主は、自分の民のあがないの主としての、また、世界の王としてのみ顔を示します。イスラエルの民は、祈りの中で、出エジプトの偉大な出来事を、目のあたりに見ているかのように思い起こします。

まず最初に、エジプトを襲った「疫病」が、まとめて簡潔に思い起こされます。この疫病は、イスラエルの民を抑圧する王を屈服させるために、主が罰として与えたものでした（8 - 9 節参照）。次に荒れ野での長い旅の後、イスラエルに与えられた、数々の勝利が思い起こされます。このような勝利を得ることができたのは、神の力強い介入のおかげでした。「国々の民をうち、力ある王たちをほろぼされた」（10 節）。最後に述べられるのは、イスラエルが長く待ち望みながらめざしてきた、約束の地です。「神は、彼らの土地を分けまえとして、ご自分の民イスラエルに与えられた」（12 節）。

神の愛は、具体的なかたちで示されます。それは、つらいときにも、喜びのときにも、歴史の中で、経験することができるとさえ言えます。典礼の役割は、この神の与えたたまものを、常に生き生きと現存させることです。それは何よりも、まず、偉大な過越の祭儀を祝うことを通じて行われます。過越の祭儀は、他のすべての祝日の根源であり、解放と救いを示す最高のしるしだからです。

3, 私たちも、この詩編の心、その神への賛美の心を持ちましょう。ローマの聖クレメンスは、『コリントのキリスト者への手紙』の長い結びの祈りの中で、このような心を

あらためて言い表しています。クレメンスはこう述べています。詩編 135 の中で、あがない主である神のみ顔が示されているように、いにしへの父祖に与えられた神の守護は、いまやキリストによって私たちに与えられている、と。「主よ、平和の恵みのために、あなたのみ顔を私たちの上に輝かせてください。私たちが、あなたの力強いみ手によって守られ、またあなたの高く挙げられた腕によって、あらゆる罪から教われるためです。言われなく私たちが憎む者た力私たちが助けてください。私たち、また地に住むすべてのものに、心の一致と平和を与えてください。かつて私たちの父祖たちが、聖性と信仰と真実とをもってあなたに呼びかけたとき、彼らにお与えになったのと同じように。…これらのこと、あるいはさらに優れたたまものを私たちに与えることができるのは、あなたおひとりです。そのあなたに、私たちは、大祭司であり、私たちの魂の守り手であるイエズス・キリストを通して感謝をささげます。キリストを通して、栄光が、世々としえにあなたにありますように。アーメン」(『クレメンスの手紙 コリントのキリスト者へ (一)』60・3-4、61・3 :Collana di Tesi Patristici, V, Roma, 1984, pp. 90-91 [邦訳、小河陽訳、荒井献編『使徒教父文書』講談社、1974年所収、参照]。

第3週 金曜日 晩課 第2唱和

詩編 135 後

1, 詩編 135 は、過越をたたえる歌です。この詩編は、晩の祈りの中で、2つに分けて唱えられます。今読まれた、詩編の後半(13-21節参照)は、「ハレルヤ」という言葉で締めくくられています。それは、この詩編の初めにも見られる、主をたたえる歓呼の言葉です。

この賛歌は、前半で出エジプトの出来事を記念しました。出エジプトの出来事は、イスラエルの過越祭の中心をなすものです。その後、ここで詩編作者は、2つのまったく異なった宗教の姿を対比させます。一方では、顔を待った、生ける神の姿が示されます。この神が、真の意味での信仰の中心となります(13-14節参照)。神は民とともにいて、力を表し、救いのわざを行います。主は、動くことも、ともにいてくれることもないものではなく、顔を待って生きています。主は、信じる者の「裁きを行い」、彼らを「力づけられる」からです。主はその力と愛をもって、信じる者を支えてくださいます。

2 その一方で、偶像崇拜が行われます(15-18節参照)。偶像崇拜は、道はずれた、偽りの宗教心の表れです。実際、偶像は「人の手で造られたもの」にすぎません。それは人間の欲望が生み出したものです。したがって、偶像は、被造物の範囲を超えることがありません。偶像には、人間の姿と同じ、口も、目も、耳も、鼻もあります。しかし、それは、動くことも、生きることもありません。まさしく、それが生命のない偶像だからです(詩編 115:4-8 参照)。

このような死んだ偶像を拝む人は、結局、偶像と同じようになります。すなわち、彼らは、動かず、脆弱(ぜいじやく)で、活気を欠いたものとなるのです。ここには、「人の手で造られたもの」に救いを求めようとする、人間の永遠の誘惑がはっきりと示されています。人間は、富や、権力や、成功や、物質に希望を置こうとするからです。残念

ながら、このような人の行く末は、預言者イザヤがはっきりとこう述べた通りです。「彼は灰を食らい、惑わされた心は、その道を誤らせる。彼は自分の魂を救うことができず、『わたしの右の手にあるのは偽りではないか』とすら言わない」（イザヤ 44:20）。

3、このように、詩編 135 は、真の宗教と偽りの宗教について考察します。真の宗教とは、世界と歴史の主である方に対する、真の意味での信仰です。偽りの宗教は、偶像崇拜です。この考察の後、典礼で用いられる祝福が述べられます(19-21 節参照)。この祝福の中で、シオンの神殿でささげられる礼拝に参加した人々の姿が示されています(詩編 115:9-13 参照)。

神殿に集まった全会衆は、声を合わせて、全世界の造り主であり、神の民の救い主である神をたたえます。この賛美は、さまざまな言葉で、また、謙遜な信仰をもって表されます。

典礼は、神のみ言葉に耳を傾けるための最高の場です。神のみ言葉は、主の救いのわざを現存させるからです。しかし、典礼はまた、神の愛をたたえるために、共同体がともに祈りをささげる場でもあります。神と人間が、出会い、抱き合うことによって、救いがもたらされます。このような救いは、まさに典礼の祭儀において実現するのです。

4、アウグチヌスは、偶像と、偶像に依り頼んでそれに似たものとなる人々について述べた、詩編のこの箇所(詩編 135:15-18 参照)を注解して、次のように考察しています。「兄弟の皆さん、信じてください。実に、彼らはある意味で、彼らが拝む偶像と似ています。彼らが偶像と似ていると言うのは、もちろん身体としてはなく、内なる人としてです。彼らには耳があります。けれども、どれだけ神が彼らに向かって叫んでも、彼らには聞こえません。『聞く耳のある者は聞きなさい』。彼らには目があっても、見えません。彼らには、からだの目はあっても、信仰の目がありません。同じように、「彼らには鼻があっても、かぐことができません。彼らは使徒パウロが言っている、あの香りがかぐことができないのです。パウロは、どのようなところでも、キリストの良い香りとなるようにと言っています(ニコリント 2:15 参照)。

キリストの甘美な香りがかぐことができないなら、そのような鼻があっても、彼らには何の役に立つのでしょうか」。

アウグチヌスは、偶像にとらわれている人が、いまだに、実際にいることを認めています。「しかしながら、主キリストが行う奇跡を信じる人は、毎日、信仰を抱いています。毎日、見えない目と、耳の聞こえない人の耳は開き、ふさがれていた鼻は息をするようになり、口のきけない人の舌は解け、足の不自由な人の足はしっかりと立ち、曲がった足はまっすぐにされています。神はこんな石からもアブラハムの子たちを造り出すことができになるのです(マタイ 3:9 参照)。それゆえ、これらすべてのことについて、私たちはこう言わなければなりません。『イスラエルの家よ、神をたたえよ』。すべての民よ、神をたたえよ。これが、『イスラエルの家よ』という言葉の意味です。教会の祭司たちよ、神をたたえよ。これが『アロンの家よ』という言葉の意味です。奉仕者たちよ、神をたたえよ。これが『レビの家よ』という言葉の意味です。他の諸国の民については何と云えばよいのでしょうか。『神をおそれる者よ、神をたたえよ』(『詩編注解』 134:24-25 : Nuova Biblioteca Agostiniana, XXVIII, Roma, 1977, pp. 375, 377)。